

「英語文学」の授業展開に関する一考察

—『マクベス』を事例として—

佐々木 隆

プロローグ

筆者はこれまでの授業の自己点検を兼ねて担当授業「英米文学史」「英語文学」の「シェイクスピア」の取り扱いについて、個別の作品を取り上げた『「英語文学」の授業展開一考察—『ロミオとジュリエット』を事例として—』（2019）、「『英語文学』の授業展開一考察—『リア王』を事例として—」（2019）、「『英語文学』の授業展開一考察—『ハムレット』を事例として—」（2020）を発表してきた。

今回は映像化されたシェイクスピアを単独で取り上げるのは『マクベス』を1つの区切りとして、シェイクスピアの取り扱い方全体については別稿で取り上げたい。

1 教職課程が求める「英語文学」の到達目標

再課程認定以前は「英米文学史」であるが、再課程認定後の科目名称は「英語文学」となった。「英米文学史」から「英語文学」への変更の意味についてはすでに論じた（佐々木 a 1-6）。

教職課程の「英語文学」で求められているものとして、到達目標には以下が掲げられている。

- 1) 文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している。
- 2) 文学作品で描かれている、英語が使われている国や地域の文化について理解している。
- 3) 英語で書かれた代表的の文学について理解している。（文部科学省

委託事業 10)

第3点は具体的に文学者乃至は作品を取り扱うことが求められていることになる。この内容についてすでに取り上げたのでここでは詳細は触れない(佐々木 b 1・2)。

2019年度のシラバス「英語文学」(英米文学史)の「授業の概要」「到達目標」では次のように示した。

授業の概要

英語文学のうち英米文学を取り扱う。英文学の背景にあるケルト文化を取り上げながら、ファンタジー文学を取り上げる。また、世界中の誰もが知っているシェイクスピアについても取り上げる。米文学についてはアメリカ先住民、人種のるつぼ、サラダボウル論などを意識しながら、人種問題が文学作品とどのような関係になるのかを社会背景と文学史を同時に考えることで理解を深めたい。英語の名台詞及びスピーチなども積極的に取り上げたい(英語文学シラバス)。

到達目標

英語で書かれた文学を学ぶ中で、英語による表現力への理解を深めるとともに、英語が使われている国や地域の文化について理解する。文学作品中の名台詞及び名句、英語のスピーチにも注目する。

観点1: 英語文学とは何かを知り、その全体像を説明できる。

観点2: 英米文学の特徴を捉え、その文化背景を理解することができる。

観点3: シェイクスピアの変容について強い関心を持ち、積極的にリサーチすることができる。

観点4: 質問や疑問への投げかけに対応しようとすることができる。

観点5：インターネットを活用し、PCの各機能を駆使して、英語文学の課題等について自分の考えをまとめ、適切に表現することができる（英語文学シラバス）。

なお、教科書は「2019 英語文学—英米文学を中心に—」として武蔵野学院大学佐々木隆研究室を発行所として学内ランより配信した。また、授業担当者の個人ホームページ「佐々木隆研究室」からもパスワードを付して配信した。教科書はPDFのため、デジタルツールに保存することができる。大学では入学時にiPadを学生に貸与している。

シラバスからわかるように、教職課程が求める到達目標に合致したものにしている。

2 何故、『マクベス』を取り上げたのか

シラバスではシェイクスピア作品中、個別の作品として『ハムレット』『ロミオとジュリエット』『リア王』『マクベス』を取り上げた。俗に言う四大悲劇(The Great Tragedies)は『ハムレット』『オセロ』『リア王』『マクベス』のことである。しかし、これはシェイクスピア自身がこのような分類をしたわけではない。後年の研究者がそう名付けたに過ぎない。筆者が『ハムレット』『ロミオとジュリエット』『リア王』『マクベス』を選んだのはシェイクスピア作品として知名度が高いからだ。これ以外には『夏の夜の夢』『ヴェニスの商人』が挙げられよう。

また、筆者の意図としてシェイクスピア映像の利用も念頭にあったため、映像化されたものを利用するにあたり、複数の映像作品(3~4本)が筆者自身がすでに入手できていることも重要な要素と考えていた。これに加えて、『マクベス』では翻案映画の黒澤明監督『蜘蛛巣城』(1957)をどうしても紹介したいというこだわりがあった。筆者が研究してきた日本のシェイクスピア受容では黒澤明監督の果たした役割は1991年以

降急速に再評価されてきたからだ。これは 1991 年に日本で国際シェイクスピア学会が開催され、統一テーマが「シェイクスピアと文化的諸伝統」(Shakespeare and Cultural Traditions) であったことが大きな要因である。

筆者が所属する学部は国際コミュニケーション学部ということもあり、単に英米文学だけを扱うよりも、多文化共生、異文化理解、異文化コミュニケーションというものが授業科目「英語文学」(英米文学史)の中にも取り入れられないかということを考えていたからである。最近ではキャリアキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーとの整合性なども必要になっていることも背景にある。

3 魔女の予言の映像比較と学生の反応

筆者が担当している「英語文学」では「映像になった文学作品」を強く意識して全体的に進めている。その背景には筆者自身がシェイクスピア映画・映像研究に長年取り組んでおり、BBC シェイクスピアの全作品の映像をはじめ、主流となるシェイクスピア映像の VIDEO、DVD、Blu-ray を所有していることから、教材としてすぐに提供できる状態にあるからだ。本来、演劇であるシェイクスピアを教室で教えるにも限界があり、これを補うために映像を使用していることもある(佐々木 d 3-4)。

魔女の予言の映像を見る前に簡単に 3 人の魔女が登場すること、現在、ちょっと先のこと、未来を予言することを筆者より紹介した。学生はこれまで、『ロミオとジュリエット』『リア王』『ハムレット』でも同様の活動を経験しているため、すでに要領を得ている。また、3 つの映像についても簡単に紹介した。なお、教科書『英語文学—英米文学史を中心に』(2019 年度)には以下のような資料を提示した。同様なものを講義中にパワーポイントで示した。



映画「マクベス」

- ・同じ台詞を複数の映画の同じ場面で比較することで、印象が大きく異なることがあります。
- ・話す口調、話し方、俳優の表情などによっても印象は大きく異なります。
- ・映画の場合には映像も気になるところです。

「マクベス」を見てみよう！

- ・オーソン・ウェルス監督「マクベス」(1948)
- ・黒澤明監督「蜘蛛巣城」(1957)
- ・ロマン・ポランスキー監督「マクベス」(1971)

黒澤明監督『蜘蛛巣城』(1957)をどうみるか

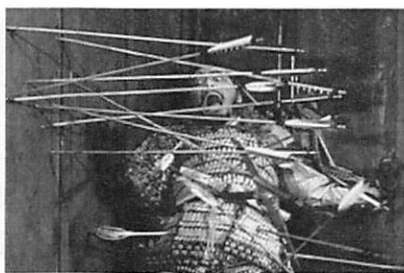
シェイクスピア映画の中でも英語圏以外の国で製作されたものだが、本場イギリスをはじめ、世界中で高い評価を受けている。さて、あなたはどんな印象を持つか？

3本の映像を比較する

・比較することによって、異なった考え方が提示される。

・「正しいor正しくない」といったことを求めているのではなく、受け手としての自分にとって、どの映像が一番、心に響くのか？ また、なぜそう感じるのか？ 台詞の意味と背景、俳優の演技、雰囲気とあわせて総合的に判断してみてください。

『蜘蛛巣城』 ↓



『マクベス』の冒頭の魔女のシーンは文化により様々な表現がされている。黒澤明監督『蜘蛛巣城』(1957)は世界的にも『マクベス』の翻案映画として高い評価を受けている。(Manvell 153) 魔女のシーンは日本文化独特の表現を映像化。(佐々木 c 92)

リアクションペーパーでは3つの質問を用意した。

(1) 『マクベス』の冒頭（魔女の予言）部分の映像を観ましたが、あなたはどの映像が最もしっくりと来ましたか。自分なりの順位をつけなさい。
(紹介順 あなたの順位)

1 オーソン・ウェルズ監督『マクベス』(アメリカ、1948)

2 黒澤明監督『蜘蛛巣城』(日本、1957)

3 ロマン・ポランスキー監督『マクベス』(ポーランド、1971)

(2) なぜ、上のような順位になったのか、そのポイントはなぜでしょうか？

(3) 『蜘蛛巣城』の弓矢のシーンについて、あなたはどのようなイメージを持ちましたか。

上記の3つの映像をそれぞれ時期列で見せた。当然、こうした映像は製作者が先行映画を意識しているからだ。第1のオーソン・ウェルズ監督『マクベス』(アメリカ、1948)は『マクベス』映画では必ず取り上げられるものであり、以降の『マクベス』映画に大きな影響を与えたものである。黒澤明監督『蜘蛛巣城』(日本、1957)は *The Throne of Blood* の英語タイトルで海外でも広く知られている翻案映画である。ロマン・ポランスキー監督『マクベス』(ポーランド、1971)では魔女はジプシー風である。それぞれの文化を背景した魔女の姿がある。

それぞれの場面の映像を1～3順に観てもらったあとにリアクションペーパーで回答してもらった。(リアクションペーパー実施は2019年11月12日) その問いは次の通りである。

(1) 『マクベス』の冒頭（魔女の予言）部分の映像を観ましたが、あなたはどの映像が最もしっくりと来ましたか。自分なりの順位をつけな

さい。

(紹介順 あなたの順位)

- 1 オーソン・ウェルズ監督『マクベス』(アメリカ、1948)
- 2 黒澤明監督『蜘蛛巣城』(日本、1957)
- 3 ロマン・ポランスキー監督『マクベス』(ポーランド、1971)

順位は1～3で必ずつけてもらった。また、(2)として選んだ理由を自由記述で回答してもらった。

	1	2	3	
ウェルズ監督	7	4	7	18
黒澤明監督	4	8	6	18
ポランスキー監督	7	6	5	18
	18	18	18	

筆者の予想では黒澤明の翻案物は比較的敬遠され、ヨーロッパの雰囲気があるものが高い評価を得るのではないかと考えていたが、その予想通りであった。では学生はウェルズ監督とポランスキー監督の映画に比較的集中した。この2つの映画に合計して約78%に及んだ。

リアクションペーパーでは3つの質問をしていた。最後の問いは以下の通りである。

(3) 『蜘蛛巣城』の弓矢のシーンについて、あなたはどのようなイメージを持ちましたか。

1957年公開だけに現在のようなCGなども当然使えず、実射していることに驚くシーンでもある。また、特撮史上、矢が首に刺さるシーンはパイオニアでもある。当時の映画はフィルム式であったことからフィルムをつなぎ合わせることで可能となったトリックでもある。このシーンについての学生のコメントはほとんどが驚きを表現するものであった。

むしろこの印象は素直なものだと思える。弓矢のシーンではこの黒澤の印象を受けた後世の映画は少なくない。この映画を観たことのある学生は誰もいなかった。

これがシェイクスピア作品の翻案ということで観てもらったが、こうした事前情報なしに観れば、日本の時代劇として十分に理解できるものだろう。

エピローグ

『マクベス』は魔女の予言が大きな意味を持っている。この魔女をどう表現するかも見どころだ。これが映像に表現されると、製作国や監督により大きく変貌する。翻案されることもある。翻案映画は英文学を通して異文化理解（国際理解）に繋がる。（マンヴェル／荒井 12）そもそも魔女に関するイメージも様々だ。3つの映像でも魔女、妖婆、ジブシーとそれぞれの文化を象徴している。特に黒澤の妖婆は運命の糸車、能『黒塚』の影響を受けている。当然、学生はこのことは誰も知らない。しかし、翻案する際に、その国の文化を反映させていることを知ってもらいたい筆者の拘りもある。国際コミュニケーション学部での教科目である「英語文学」（「英米文学史」）では単に英語文学を教授するだけでなく、学部・学科の目的として「（3）自国文化や歴史、社会を理解すること」（学則第4条）も重要な項目である。異文化を理解するためには自文化の理解が必要である。また、国際理解が日本の教育界の4大柱のひとつにもなっているのである。（示村 47）どの科目を担当するにしても、その科目の位置付けをシラバスに反映させる、反映させないとしても授業に反映させることは必要であろう。

引証資料

学則第 4 条. 「武蔵野学院大学学則」

佐々木隆 a (2017). 「『英語文学』に関する一考察—実践例と今後の展開—」、『武蔵野教育研究』、第 3 巻第 14 号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 b (2019). 「『英語文学』の授業展開—考察—『ロミオとジュリエット』を事例として—」、『新教育課程研究』、第 9 号、武蔵野教育研究会。

佐々木隆 c(2019). 教科書『英語文学—英米文学史を中心に—』(2019 年度)。

佐々木隆 d (2020). 「『英語文学』の授業展開に関する一考察—『マクベス』を事例として—」、『新教育課程研究』、第 14 号、武蔵野教育研究会。

シラバス「英語文学」(2019). Musashino Academic Station, tal.k.musashino.ac.jp/Kyoin/web/Syllabus/WebSyllabusSansho/UI/WSL_SyllabusSansho.aspx?P1=02101760&P2=2019&P3=20191215、2019 年 12 月 15 日アクセス。

示村陽一(2002). 「『異文化』の概念の再検討—グローバル化と異文化理解—」、『武蔵野女子大学大学院紀要』、第 2 号、武蔵野女子大学大学院。

ロジャー・マンヴェル／荒井良雄訳 (1974). 『シェイクスピアと映画』、白水社。

文部科学省委託事業. 「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業 (平成 28 年度報告)」

[www.pref.osaka.lg.jp/attach/4475/00271230/eigokyoinjigyo_2950.pdf#search=%27%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81%E5%A7%94%E8%A8%97%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E3%80%8C%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E6%95%99%E5%93%A1%E3%81%AE%E8%8B%B1%E8%AA%9E%](http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/4475/00271230/eigokyoinjigyo_2950.pdf#search=%27%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81%E5%A7%94%E8%A8%97%E4%BA%8B%E6%A5%AD%E3%80%8C%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E6%95%99%E5%93%A1%E3%81%AE%E8%8B%B1%E8%AA%9E%、2019 年 11 月 9)、2019 年 11 月 9

日アクセス。

Manvell, Roger (1971). *Shakespeare and the Film*. Praeger Publishers.

【キーワード】英語文学、リアクションペーパー、シェイクスピア映画、
『マクベス』、翻案

『新教育課程研究』（第1号～第14号）

佐々木隆「特別活動と総合的な学習の時間における人間形成の教育的意義」（『新教育課程研究』第1号、武蔵野教育研究会、平成30年1）、1-15頁

佐々木隆「人間関係の構築の必要性について」（『新教育課程研究』第2号、武蔵野教育研究会、平成30年2月）、1-17頁

佐々木隆「イギリス文化の源流・ケルト文化の取り扱いについて—高等学校から大学へ—」（『新教育課程研究』第3号、武蔵野教育研究会、平成30年5月）、1-45頁

佐々木隆「アメリカ文化の根底：『人種のるつぼ』から『サラダボウル論』—中学校・高等学校から大学へ—」（『新教育課程研究』第4号、武蔵野教育研究会、平成30年6月）、1-38頁

佐々木隆「アメリカの源流：American Indianはどう扱われて来たか—中学校・高等学校から大学へ—」（『新教育課程研究』第5号、武蔵野教育研究会、平成30年7月）、1-26頁

佐々木隆「特別活動 部活動の取り扱いに関する動向を巡って」（『新教育課程研究』第6号、武蔵野教育研究会、平成30年8月）、1-31頁

佐々木隆「教職課程（再課程認定）における英語学の位置付け」（『新教育課程研究』第7号、武蔵野教育研究会、平成31年3月）、1-27頁

佐々木隆「教育現場における外部人材の活用について」（『新教育課程研究』第8号、武蔵野教育研究会、令和元年5月）、1-19頁

佐々木隆「『英語文学』の授業展開—考察—『ロミオとジュリエット』を事例として—」（『新教育課程研究』第9号、武蔵野教育研究会、令和元年7月）、1-20頁

佐々木隆「『英語文学』の授業展開—考察—『リア王』を事例として—」（『新教育課程研究』第10号、武蔵野教育研究会、令和元年8月）、1-12頁

佐々木隆「学習指導要領にみる総合的な学習の時間・総合的な探究の時間における評価の問題」(『新教育課程研究』第 11 号、武蔵野教育研究会、令和元年 10 月)、1-16 頁

佐々木隆「英語辞書に関する学生の意識について」(『新教育課程研究』第 12 号、武蔵野教育研究会、令和 2 年 1 月)、1-16 頁

佐々木隆「英語教育に見る道徳的観点」(『新教育課程研究』第 13 号、武蔵野教育研究会、令和 2 年 2 月)、1-27 頁

佐々木隆「『英語文学』の授業展開に関する一考察—『ハムレット』を事例として—」(『新教育課程研究』第 10 号、武蔵野教育研究会、令和 2 年 3 月)、1-10 頁

執筆者一覧

佐々木 隆 武蔵野学院大学教授

新教育課程研究 第15号

2020年4月15日 発行

武蔵野教育研究会 編集・発行

〒350-1328

埼玉県狭山市広瀬台3丁目2番1号

武蔵野教育研究会事務局

武蔵野学院大学 佐々木隆研究室

Studies on New Curriculum

Number 15

15 April, 2020

The Society of Musashino Education Studies